

〔「中世の人と美術」展によせて〕

中院通冬が生きた時代の美術 —14世紀美術の一側面—

本展覧会は、鎌倉から室町時代、動乱期を生きた人々に焦点を当てる企画です。特に注目するのが中院通冬(1315～63)です。両統迭立から南北朝の併存という、政治情勢が不安定な時期に活躍した公卿で『中院一品記』という日記を著しました。内大臣正二位通顕の子であり、2歳の時に叙爵、15歳の嘉暦4年に従三位、三年後に権中納言に任じられます。その後、暦応3年12月に権大納言となり、康永元年正月に正二位へと昇任します。3月には氏長者となり、通冬は28歳で源氏の棟梁としての地位を得ます。貞和5年(1349)9月には大納言に任じられますが、当時、足利尊氏と弟直義の権力闘争である「観応の擾乱」が起こり、観応2年／正平6年(1352)11月に尊氏が南朝に降ると、年号も南朝年号の「正平」に統一されます。翌12月には通冬も南朝方へと動き、京都に戻るのは康安元年(1361)のことです。死去直後の貞治2年閏正月25日に従一位に叙されました。

『中院一品記』には通冬が22歳から35歳までの記事が認められます。自筆原本は東京大学史料編纂所に所蔵され、江戸期の写本が国立公文書館内閣文庫や京都大学附属図書館に収められます。自筆原本には光厳天皇宸筆書状をはじめ、記事に関連する文書の原本が収められ、料紙には洞院公賢、中原師右をはじめとした公家の、通冬宛自筆書状が用いられるなど、紙背も貴重な史料となっています。

当館には、日本中世史の研究者、中村直勝氏が蒐集した600点あまりの古文書が所蔵されます(双柏

文庫)。この中に洞院公賢の自筆書状があり、紙背が『中院一品記』の一部であることが分かりました(図1)。暦応4年(1341)正月6日条で、直前に接続される部分が史料編纂所に所蔵されます。五位以上の位階を受ける「叙位儀」という宮中で行われた儀式に関する内容で、後半部分には叙位された名簿の一部が認められます。展覧会では江戸時代以来となる両者の再会を果たすほか、石清水八幡宮炎上、後醍醐天皇崩御など、当時の重要な政治史の一コマを伝える記事を展示いたします。

紙背を記した洞院公賢(1291～1360)は左大臣実泰の子であり、文保2年(1318)権大納言、元徳2年(1330)内大臣、南北朝分裂の際には北朝の重臣として活躍し、興国4年／康永2年(1343)左大臣、5年後には太政大臣にまで昇ります。前に触れた「正平一統」では南朝に協力を要請されるなど高い学識を持ち、有職故実詳しく、朝暮の信頼を集めた公卿です。公賢の異母弟に石山寺座主を務めた益守がいます。公賢と益守によって制作が進められたのが石山寺所蔵「石山寺縁起」です。観音霊場として奈良時代以来信仰を集める同寺の縁起、観音の霊験を七巻33段にわたって描いたものです。ただ、絵の制作は七巻同時になされたのではなく、巻第一から三が鎌倉時代後期、巻四・五が室町時代、巻六・七が江戸時代です。巻第一冒頭の詞書によると「正中の暦王道恢弘し仏家紹隆せることをしらしめむ」とあり、巻第六・第七の詞書には両統の外戚として権勢を誇っ

た洞院家の繁栄を観音の霊験によることとする記載のあることから、後醍醐天皇の正中年間(1324～26)に、企画されたと見られています。その制作背景には、西園寺公衡(1264～1315)によって発願され、宮中絵所預であった高階隆兼が描き、異母弟の覚円によって春日大社に奉納された「春日権現験記」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)が契機となった点が指摘されています。すなわち、公衡は春日明神の加護に対する御礼と家門の繁栄を願って発願し、詞書の作成を主導したのが覚円でした。公衡・覚円の連携に対抗すべく公賢・益守によって制作されたと見られています。

両統迭立期、家門の繁栄を願って制作された作例に、湯木美術館所蔵「春日宮曼荼羅」が挙げられます。銘文から正安2年(1300)に藤原宗親が発願し、南都絵所芝座の絵師観舜によって描かれ、賛文を亀山法皇が記したことが分かります。この年、宗親の娘と後二条天皇との間に邦良親王が誕生しており、皇子の誕生と立太子への願い、亀山法皇にとっては大覚寺統の繁栄を春日明神へ祈願することが契機となったことが明らかにされています。同様に、当館に所蔵される「柿本宮曼荼羅」も、实景に基づいて描かれた景観が、既に荒廃していた柿本人麻呂に関わる遺跡を冷静に描いており、当時の和歌の二大勢力であった京極派・二条派のうち、京極派の歌風に通じることから、弘安2年(1279)に没した京極為兼の父、為教の追善を目的とした制作と推定されます。これらの作例は、両統迭立期の宮中での絵画制作を考える上で不可欠な作例です。

「石山寺縁起」は、こうした宮中における絵画制作の系譜を受けた作例であり、南北朝、室町時代へと移りゆく時代の中で制作が続けられました。特に、巻第五を描いた絵師が、

栗田口隆光(～1414～38)とされる点は重要です。応永21年(1414)に制作が始められた「融通念仏縁起」(清涼寺蔵)の絵師として、六角寂濟、土佐行広らとともに名を連ねます。青蓮院や知恩院の絵画需要を満たした絵師集団の系譜に連なり、初期土佐派の絵師たちと並んで、当時のやまと絵を代表する絵師の一人です。この他、隆光の作例として「誉田宗廟縁起」三巻(誉田八幡宮蔵)が知られます。

応神天皇陵の築造に始まり、欽明天皇による社殿の造営、聖徳太子、役行者、空海などの祖師たちの参籠の様子が描かれます。下巻の奥書から、永享5年(1433)4月21日に室町幕府6代将軍足利義教によって奉納されたことが分かります。絹本に描かれた豪華な絵巻物であり、義教には「春日権現験記」の先例が念頭にあったことと思われます。画風には水墨技法や宋代人物画の影響が指摘され、やまと絵の様式展開を考える上でも重要な作例です。展覧会では隆光が関与した、「石山寺縁起」巻第五(図2)と「誉田宗廟縁起」下巻(図3)を展示いたします。

これらの絵巻は、鎌倉時代後半から南北朝時代、室町時代へと移り変わる激動の時代に制作されました。公家と武家の違いはありますが、ともに宮中周辺にいた人々が関わり、彼らの求めた「やまと絵」の理想像を窺うことができます。ここに、「春日宮曼荼羅」「柿本宮曼荼羅」を加えると、両統迭立から南北朝に至る動乱の時代、通冬周辺にいた人々の美意識と絵画制作の意義を知る重要な手がかりになると思われます。(古川播一)

※図2は『石山寺縁起』〈日本絵巻大成18〉中央公論社、1978年より複写いたしました。

図1

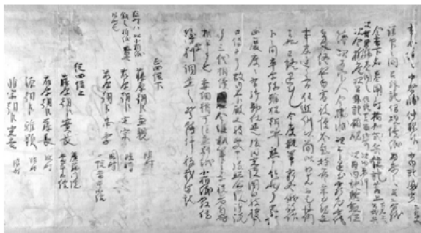


図2



図3



季刊 美のたより No.191

平成27年 7月3日

発行 大和文華館